百々裏話（82）

おもてあきら

◉『仙助座一件留について』(3)

松浦史料博物館蔵の『仙助座一件留』は、前々回と前回に紹介した(イ)～(チ)の部分が本体と認められるが、そのあとに、編者自身の仙助座についての見解や見聞が、詳細に追記されている。(リ)注目すべき記事を多く含んでいるので、その全文を掲出しよう。

一、抑、仙助座の由来を考るに、むかし近江猿楽、伊勢猿楽、奈良猿楽、など唱へて、国々にその党あり。凡十六家ありしと猿楽伝に見えたり。京都にても、上京に住むを上懸りといひ、下京にすむを下懸り抔となへ、其頃までは歌舞妓の興らざる以前なれば、諸人見て楽しむものハこの猿楽のみにて、田楽抔よりは又一段立上りて面白くもて奏したる猿楽師のその中より、秀吉公ハ勿論、神君、又ハ加賀の年家抔別して御懇意に召れたる猿楽どもを撰び給ひて、江戸にも召出され、加州にも呼下され、自ら能役者の家といふもの出来たるなるべし。此頃にや有けん、勅命を背きて江戸に下りゆきしとて勅勘を蒙り、旧家の猿楽どもハ和歌、蹴鞠を今に指留られたるとも也。扨、この猿楽の中より堪能の人を五座の猿楽に撰びあげ給ひて、其撰りくずの猿楽が其儘業をつとめ、諸国を廻り、勧進して、世を渡りしなるべし。士の扶持なき者を浪人といひ、猿楽の扶持なきものを何座々々と呼ばれ、幾連にも成りて諸国を廻りたるなるべし。近頃迄ハ、辻座・乞食座抔唱へて其党残りたりしが、いつとなく絶て、今ハ江戸の五座の弟子筋の外ハ、仙助座一座になりたると也。

天祥公御代、御年ハ御四十一才、寛文二年に、日吉彦大夫といふ者、七郎宮勧進能を勤めし由、旧記に見えたり。当年（安政二乙卯年也）迄、百九十四年になれり。安清公御代、御年ハ御三十歳の御頃、寛保元年（当卯迄百十五年ニ成ル）に当御城中にて能御覧あり。是も町人共勧進能相願候内一日献上願候而有之候也。何れも仙助座ニハあらず。仙助座ハ、宝暦年中より三代以前が元祖の由。宝暦以前の三代迄ハ江戸の観世の座なりしが、服部鶴翁と申す者大坂へ下り指南致し、夫より仙助座を開き、当仙助迄七代、右先祖よりハ凡十代にも成て、旧家といふべし。右代数を以て押て慮れバ、元祖ハ御治世の初頃の者なる事、疑ふべからず。七代目の仙助、此たび七郎宮におゐて凡百九十余年を経て勧進能旧復の時節に遇ひ、願たる町人池田作兵衛より呼下され、数日の能ありて、むかしを忍ぶに余りあり。拝殿を横にとり、能を横向にして其体を得る事、天祥公の思召と見えたり。宗廟の神慮に叶ふ事疑べからず。

扨、仙助座の姿ハ、むかし落武者を抱へ集めたる大将の様なるものにて、寄特にもあの位に人数を揃へ、小人数にて役々を助合ひ働らかせ、諸国を廻り世を渡ることハ、仙助の指揮行届たるといふべし。しかし惜き事には四役の下手、地謡の腹なき踊り拍子にて、扨々気の毒なり。仙助の舞にくきといふ事むべなり。

仙助は上手なり。世に仙助座といはれたる一座の大夫といひても申分なし。別して足宜く躰利たり。謡ハ先代の観世大夫の謡に其儘なり。所作ハ観世の所作にあらず。喜多流の所作の如し。形ハ観世の形なれども、違たる所もあり。べたに舞合にすはる所作抔ハ江戸の仕手方には無き事なり。

西の大関と申さんハ、伊藤久米三郎が狂言なり。是ハ上手なり。仙助同等の位なるべし。江戸の家元にしても申分なからん。形ハ泉流のよしなれど、江戸の鷺・大蔵に大同小異、格別に異なる事なし。第一腹が利きたり。

長谷川来作の脇ハ関脇なり。謡至極宜しく、腹も利きたり。詞の慥なる所ハ仙助よりも宜

き所あり。少し含み声なれども、息合宜く候。業ハ仙助には及バず。脇の方宜しく、仕手方ハ悪し。其上惜き哉足間延びすぎ候也。

是等に並ぶる幕之内ハなけれども、押て伊東兎作を取組せて見ん。是ハ相応の狂言師と申て宜しく、別して太郎官者得手なるべし。上手のうち也。谷口庄左衛門の脇を幕之内前頭の中程にも置べき歟。しかし年寄て取をくれに成たる形ち也。尤江戸の脇師に違ふ事なし。ふるひ声の処ハ宜しかれど、詞分りかぬる也。随分脇師にしてハ申分なし。此以下、各品位ハ同じからねど、くだ〳〵しければ略す。

一、仙助座ニ而、所作の内いやしく見え候事、或ハ下品の文句等有之候は、却て古の風残しにて、江戸の五座ハ段々吟味して能き所を取り、悪敷所ハ直せしにて有べく思はるゝなり。泉流の狂言も同じ事なり。

一、仙助父を金森惣右衛門と云（金森の釈。前に委し）仙助此許へ来り候前、下の関にて関寺小町の能を勤むべき所、病気にて、仙助斗此許へ来りし跡にて、惣右衛門ハ死しぬ。

扨、仙助、此許の能を仕舞、豊後府内へ参りし処、同所にて放蕩の身持に成、夫より座中の者共三匁請に障り、離れ〳〵に成、終に此座崩れし也。職業とハ申ながら、仙助親の喪を不レ憚翁等相勤、其上放蕩の身持致せし故、天命のしからしむる所なるべし。

一、此後、仙助の跡ハ勿論、たとひ器量の人ありとも、何座など唱、諸国勧進等の事ハ出来まじく、惜むべき事也。是も申楽の衰微のひとつ也。故にくだ〳〵しけれど記し置くもの也。

以上が(リ)の全文で、このあとに「安政二年乙卯十一月」の年記があって終っている。前半は辻能及び仙助座の由来についての見解が主で、後半は平戸へ来た仙助座の芸風や平戸前後の座の動向が主であるが、後半の記事が特に有益である。「小人数で役々を助合ひ」と言うのは、一人の役者が諸役を兼業していたことを意味するのであろうし、囃子方・地謡方の力量不足の指摘や、謡は観世、所作は喜多流に近いとの印象も、当時の仙助能の実態を教える貴重な記事である。殿田良作氏の論考に紹介されている嘉永元年(一八四八)の金沢での番組に「貴田六平太・離えせがれ、仙助手合能」と題している事も参照される。相撲の番付になぞらえて、仙助・伊藤久米三郎・長谷川来作・伊藤兎作・谷口庄左衛門らの芸風を批評している点も興味深い。七年前の嘉永番組には仙助と谷口の名のみ見え、他の三人の名は見えない。仙助座がそのつど異なるメンバーを集めて興行に出ていたことも推測される。先代仙助(六代目)たる金森惣右衛門が平戸興行の直前に下関で病歿したというのも新資料である。安政二年(一八五五)のことであろうが、金森は時に62歳であった。

平戸興行後の仙助座が、仙助の放蕩のため豊後府内(大分市)で一座解散の憂目を見たという記事は最も貴重である。伊原敏郎氏『歌舞伎年表』によると、翌安政三年五月の大坂での海老蔵一座の歌舞伎に堀井仙助が参加しているが、多才であった仙助は一座解散後に糊口の途を歌舞伎に求めたのであろう。殿田氏の論考によると、明治36年12月12日の金沢の新聞に、九代目堀井仙助が享年76歳で大阪で病歿した由が報じられているから、安政二年に仙助座が解体した後にも、仙助の名は八代目・九代目と襲名されて明治に至ったことが知られるが、八代目・九代目が辻能を興行して廻ったかどうかは明らかでない。幕末・維新後の能界の状況を考慮すると、その可能性はかなり薄いようで、組織的な仙助座の活動、すなわち辻能の活動は、安政二年が最後であったのではなかろうか。

『仙助座一件留』を紹介しているうちに、仙助能及び辻能について種々言及したい事を見出だしたが、今回は一応資材紹介だけにとどめておくことにする。(46・6・3)